愛、変わらず

吾仁守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛、変わらず

【Ｎコード】
Ｎ２５３０Ｙ

【作者名】
吾仁守

【あらすじ】
私は一つ年上の先輩と付き合っていた。でも、先輩の卒業と同時に……フラれた。こんな私の、先輩と別れた後のラブストーリー。

☆第一話☆『私……フられちゃった（泣）』

「今年の春はいつもより寒いなぁ～」
思わず私は独り言を言っていた。
「本当に寒いのは私の心なのかも……」
また独り言を言ってしまった。
私がこんな状態になってしまったのは、一週間前のあの事件が原因だ。……事件は言い過ぎかも。
一週間前に私は……フられた。私はフられた理由が全くわからなかった。私と彼氏の関係はかなり良好……だった。
フられた理由で思い当たるのは……卒業式？　かな。彼氏と私は高校の先輩と後輩で、彼氏は今年卒業した。彼氏の卒業と同時に私はフられた。……やっぱり卒業式が原因だ。
「遠距離恋愛になるのがそんなに嫌だったのかなぁ？」
あ、また独り言を言ってしまった。
「お母さん、あのお姉ちゃん独り言を言ってるよ」
子供が指を指しながら、私のことをお母さんに話しかけている。
「こ、こら。人に指を指しちゃダメですよ」
お母さんは、私に指を指していた子供を叱った。
「すみません」
お母さんは私の方を向いて謝り、その場から遠ざかっていった。
「変な人に関わっちゃダメよ」
私に聞こえていることも知らずに、少し離れた所でお母さんが子供に言い聞かせていた。
「お母さん……聞こえてますよ（泣）」
私はその場でぼそりと呟いた。

私は、赤城陽(あかぎはる)。今年高校三年生になって、そして独り身になった。
「彼氏がいなくなると、こんなにも寂しくなるんだね」
「そんなことを呟いてる暇があるんなら、さっさとご飯を食べて学校に行きなさい！」
「はーい」
私のお母さんはいつもマイペースだ。私がフラれたのに、いつもと同じ接し方をしている。むしろ、この方が気が楽だ。
私はご飯を食べて、学校へ行く準備をした。
「行ってきまーす」
「行ってらっしゃい」
いつもと変わらない学校への登校。唯一変わったのは、彼氏が迎えに来てくれないことだけ。
「今日もちょっと寒いなぁ～」
私は、何も考えなくていいように学校まで全速力で走った。

「ハァハァ。全速力で走るとこんなに早く着くんだ」
前だったら二十分もかかっていた学校までの道のりが、今日は十分で着いた。……今度から毎日走ろうかな。
「あれ？　陽？　おはよー。今日はいつもより早いわね」
「あ、桜姫(さき)。おはよー。今日は走ってきたから、いつもよりも十分早く着いたわ」
彼女は田中桜姫。私と桜姫は幼稚園の頃からずっと友達だ。
「陽は何で走ってきたの？」
「な、なんとなくよ！」
「へぇ～、なんとなくね。……実は『彼氏にフラれた事を忘れるために走ってきた』……なんてことは無いわよね？」
「ギクッ（汗）」
何で私の考えを、こんなにもピンポイントで当てるのよ！？
「さ、桜姫、とりあえず教室まで行きましょう」

「まさか！　図星だったの！？　てか、別れたの！？」
「とりあえず教室に行きましょーね」
「ちょ、ちょっと……陽！？　痛いんだけど……」
私は話を誤魔化すために、半ば強引に、靴箱から教室まで桜姫を引っ張りながら歩いた。

☆第二話☆『親友』

私と桜姫（半ば強引に引っ張ってきた）は教室に着いた。
「ふぅ～、やっと教室に着いたわ。あっ、やばい！　私、春休みの課題が終わってなかったわ。だから走ってきたんだ。桜姫、そういうことだから」
「……陽、あんたが真面目な子だってことは昔から知ってる。恋愛をしてようが、部活をしてようが、課題はちゃんとやってくる子だってことも」
「桜姫……」
「何があったの？　私には隠し事はしないでよ」
「実は……」
私は、卒業式の後に彼氏にフラれた事を桜姫に話した。
「あんたの元彼……サイテーよ！　卒業と同時に陽と別れるなんて（怒）」
「さ、桜姫がそんなに怒る必要は無いわ。……たぶん私が悪いのよ」
「やっぱり元彼が全部悪い！　こんなに可愛くて優しい陽を裏切ったんだから」
「裏切ったは言い過ぎだよ」
「あんな人を庇う必要は無いわよ。あんな人のことはさっさと忘れて、新しい恋を見つけるわよ！」
「……新しい恋。見つけられるかなぁ？」
「弱気になっちゃダメ！　何事も強気でいかなきゃね」
「そうだね。私、桜姫みたいに強くなる」
「あんまり私みたいにならない方がいいわよ」
「どうして？」
「……男子が近寄ってこなくなるからよ」
「そ、そうなんだ……。桜姫可愛いのに」
「陽に比べたら、私なんか全然可愛く無いわよ。それに、現在（いま）の男

子達は性格を重視してるみたいよ」
「性格が良くないとモテないってことね」
「そうね。私は今日から女を磨くわ。クラスも変わったし、ちょうどいい機会だわ」
「桜姫は今のままでいいと思うんだけど……」
「ありがとう陽。でも、そう言ってくれるのは陽だけよ」
「そうなの？」
「うん。だから私はもっといい女になれるようにがんばるわ。幸いにも、このクラスで私のことをよく知ってる男子は少ししかいないみたいだから」
「ホントだ。知らない男子が多いね」
「そうなの。そして、イケメンで優しそうな人が多い」
「相変わらず桜姫はイケメン好きだね」
「相変わらずとは失礼ね。性格もちゃんと視るわよ。今日から私は変わるんだから」
「ホントかなぁ？」
「ホントよ。いい彼氏を見つけられるように、しっかりと見定めるの」
「今回は本気（マジ）だね！」
「もちろん！　お互いに、いい彼氏をつくるわよ」
「うん！」
　こうして、私と桜姫のいい彼氏づくりが始まった。……何か私、切り替えがかなり早い気が……。ま、いっか。

☆第三話☆『まずはお友達から』

新しい恋を見つけると決心した私と桜姫は、まずは男友達をつくることにした。
「陽、まずは男友達をつくることが大切よね」
「そうだね。まずは男子と仲良くなる必要があるね」
「そうよ。そして、最初に誰と仲良くなるかが重要よ！　仲良くなる人を間違えたら、高校最後の一年は悲しく寂しいものになること間違い無しだわ」
「桜姫は大袈裟だわ」
「大袈裟じゃないわよ。男なんて、みんな獣(けだもの)よ！　化けの皮を被ってるの！」
「そうなの！？」
「そうよ！　陽は男のことをまるでわかってないわね！」
「ご、ごめんなさい」
「な、なんで謝るのよ？」
「桜姫の気迫にびっくりして……つい……」
「男は獣ってことはしっかりと認識しておくこと。わかったわね？」
「りょ、了解です！　隊長！」
「た、隊長って何よ！？」
「なんかそんな感じがしたから」
「わ、私は隊長なんて柄じゃないわ」
「桜姫が照れてる。可愛いー」
「べ、別に照れて無いわよ！　と、とりあえず誰かに声を掛けてみるわよ」
「わかりました！　隊長」
「隊長って呼ぶのやめなさーい！」
「また桜姫が照れてる。可愛いー」
「もう！　陽のいじわる！　……ま、いいわ。とりあえず、誰かに

声を掛けるわよ」
桜姫はクラス中を見渡した。そして、あることに気がついた。クラス中の視線が自分たちに集まっていることに……。
もちろん、いつからこんなことになっているかなんて知る由もなかった。
「……やばいわね」と、桜姫が小声で言った。
「何が？」と、陽も小声で言った。
「今までの私たちの会話を、男子に全部聞かれてたかもしれないわ」
「うん。知ってるよ」
「な、何で教えてくれなかったの！？」と、桜姫が大声で言った。
今度はクラス中がざわつき始めた。
「や、やばっ」
桜姫は赤面し、小声で、
「何で教えてくれなかったの？」と陽に問い掛けた。
「桜姫がすごく楽しそうに話してたから、言えなかった。ごめん」
「は、陽は悪くないわ。悪いのは、気づかなかった私の方よ。……
……これから、このクラスは、私たちにとって戦場になるわよ」
「なんかホントに隊長みたい」
「もう何でもいいわよ！」
私と桜姫は、アウェイな状況の中で、男子に声を掛けることを決心した。

☆第四話☆『お友達になっちゃった』

クラス中の人に羞恥(しゅうち)を曝(さら)した私たち。そんな私たちと仲良くしてくれそうな男子に声を掛けるために、私たちはクラス中を見渡していた。

クラスには、いろんな男子がいた。ほとんどの男子は、一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

「ねぇ、陽。誰に話し掛ける？」

「桜姫は、誰が仲良くしてくれると思う？」

「うーん、あそこにいる人とか優しそうだよね」

「うん。優しそう」

「でも、ちょっと私のタイプじゃないかも」

「あれ？　性格も重視するんじゃなかった？」

「そ、そうだったわ」

そんな会話をしていたら、会話の中心になっていた男子が近づいてきた。

「ねぇ君たち、さっきまで面白そうな話をしてたよね？　次は何の話をしているの？」

思いがけないチャンスが舞い込んできた。

「うーん、……あなたについての話」と、桜姫が答えた。

「へぇー、僕についてかぁー。何て話してたの？」

「優しそうだから、友達になりたいなぁー、って話してたの」と、またも桜姫が答えた。

全く会話に入れない私。

「僕と友達になりたいの？」

「う、うん」と、戸惑いながら、またも桜姫が答えた。

「じゃあ友達になろう！」

「はやっ！　……じゃ、じゃあ、まずは自己紹介をしましょ」

「そうだね。僕は、立花流(たちばなながれ)。君は？」

立花くんは、私の方を見ながらそう問い掛けてきた。
「わ、私！？　私は赤城陽」
「陽ちゃんって呼んでいい？」
「あ、はい。私は立花くんって呼びます」
「うん。いいよ」
「ちょっと待ったぁーっ！　何で私の存在を無視するのー！？　立花くん、今まで私と話してたよね？」
「あ、ごめんごめん。さっきまで君とずっと話してたから、次は陽ちゃんと話そうかなぁと思って」
「そうだったの？　……せ、せめて自己紹介だけでもさせてぇー」
「それじゃあどうぞ」
「なんかかなり言いづらいんですけど……。ま、いいわ。私は田中桜姫」
「じゃあ桜姫ちゃんって呼んでいい？」
「OKよ。私も立花くんって呼ばせてもらうわ」
「陽ちゃん、桜姫ちゃん。今日からよろしく」
「『こちらこそ、よろしく』」
こうして私たちは、立花くんと友達になった。なんかかなりあっさり友達になったけど、大丈夫かなぁ？　……ま、いっか。

☆第五話☆『さ、避けられてる！？』

立花くんと友達になった私たちは、立花くん以外の男友達をもっとつくるために、クラスに立花くんの知り合いはいないのかを尋ねていた。

「立花くんは、このクラスに知り合いはいるの？」と、桜姫が尋ねた。

「このクラスに知り合いは……いないみたい」

「そ、そうなんだ」

「ごめんね。役に立てなくて」

「そ、そんなことないわよ」

「そうよ。とりあえず、仲良くなれそうな人を探そ！」と、私が提案した。

またも私たちはクラス中を見渡した。

「立花くんは、誰が友達になってくれると思う？」

「うーん、……あの人とかどうかなぁ？」と、立花くんは一人の男子を指さした。

「なかなか人の良さそうな人だね」と、桜姫が答えた。

「よし、じゃあ声を掛けてみよう！」と、立花くんが言い、男子に近づいていった。

だが、男子は立花くんから逃げるように教室から出て行った。

それから立花くんは、とぼとぼとこちらに戻ってきた。

「……なんか僕避けられてるみたい」

立花くんは、かなり落ち込んでいた。最初の印象とはかなり違う人に思えた。

「た、立花くん。落ち込まないで」

「う、うん」と言いながらも、まだ落ち込んでいるように見えた。

意外と立花くんは打たれ弱いことがわかった。

改めて、私たちはクラス中を見渡した。

一時見渡して、あることに気がついた。……クラス中の人が私たちと目を合わせないようにしていることに……。
「……みんな目すら合わせてくれないような気がするんだけど」と、桜姫が言った。
「みんな目を合わせないようにしてるんだよ」と、私は言った。
「私たちと関わりたくないのかな？」
「……たぶん。今年は受験もあるし」
「そうだね。受験があるのに、変に騒いでいる私たちと仲良くしてくれる人なんてなかなかいないよ」
「立花くんは、なかなかいない人の一人だね」
「……僕は、なかなかいない人の一人かぁ」
なぜかテンションの上がっている立花くん。……立花くん、実は天然なのかな？
「そ、そうだね。……とりあえず、まずは私たちのクラス中での印象を変えないとね」と、桜姫が言った。
「三人よれば文殊の知恵なんて言うからね。まずは三人で何とかしましょ」
「さすが陽。陽がいれば百人力よ！　立花くんも頑張ろうね」
「やっと会話に入れてくれた！　僕も全力を尽くすよ」
三人は結束し、もっと多くの男友達をつくるために努力することを誓った。……はぁ、彼氏はいつごろできるんだろう？

☆第六話☆『数々の難関』

午前八時。担任の先生が来てホームルームが始まった。
「おはよう！　今日からこのクラスの担任をすることになった原熱志だ。今年で三十路になる。よろしくな！」
クラス中が少しざわつき始めた。先生が三十路に見えないくらいイケメンだったからだ。
「俺が担任になったからには、お前たちの目標を全部実現してやる。だが、条件付きだ！　毎日努力をすること、それと……恋愛をしないこと！　これが条件だ」
ざわついていたクラスが一斉に静まりかえった。
「よしっ、じゃあ一人ずつ自己紹介をしてもらおうか」
一番前の人から順番に自己紹介をしていき、立花くんの番がきた。
「僕は立花流。現在、男友達募集中！　よろしく！」
「そうか、立花は男友達を募集中なのか。じゃあ、先生が友達になってやる！」
「えっ！？　じゃあお願いします」
「おう、よろしくな」
「『あはははは』」
クラス中から笑いが巻き起こった。やっぱり……立花くんは天然だ。
立花くんの後に何人かが自己紹介をし、次は桜姫の番になった。
「田中桜姫です。今年の目標は彼氏……じゃなくて、山竜大学合格です」
「田中、なんか彼氏って聞こえた気がするんだが」
「き、気のせいですよ先生。とりあえずよろしくお願いします」
桜姫、本音が出てるよ……。
そんなこんなで、とうとう私の番になった。
「えーっと、赤城陽です。目標は一柳大学合格です。よろしくお願

いします」
全員の自己紹介が終わった。一段と目立っていたのは、やっぱり立花くんかな。
「やっと全員の自己紹介が終わったな。今日からビシバシ行くからな！」
彼氏ができても、原先生にはバレないようにしないと……。

今日一日の授業がやっと終わった。
放課後、クラス中の人がいなくなってから、私たち三人の作戦会議が開かれた。
「どうすれば印象を良くできるかな？」と、私は質問をした。
「印象を良くするためには、まずは挨拶かな」と、立花くんが答えた。意外とまともな答えだった。
「挨拶かぁ～。……明日の朝から、廊下ですれ違ったクラスメート全員に挨拶をするっていうのはどうかな？」と、桜姫が提案した。
「よしっ、じゃあそうしよう！」
「決まりだね！」
こうして私たちの作戦会議は終わった。でも、私は少し不安に思っていた。挨拶をするだけで印象が変わるのだろうか？　……ま、どうにかなるでしょ！

☆第七話☆『私たちってウザい？』

登校二日目。今日から作戦決行だ！　私たちは顔を合わせたクラスメート全員に挨拶をした。挨拶を返してくれる人もいれば、無視する人もいた。

「初日の反応は微妙だったね」と、立花くんが言った。

「印象変わったのかな？」と、桜姫が言った。

「ごく少人数かもしれないけど……」と、私が言った。

「少人数でもいいんじゃない。少しでも仲良くしてくれる人が増えるといいね」

こんな会話をしていると、こちらに近づいてくる男子が一人いた。ヤンキーっぽい人だ。

「お前たち、朝挨拶をしてきた奴らだよな？」

「そうだよ。君は？」

「俺？　俺は篠山早駆（しのやま さく）だ。お前たちは、昨日かなり目立ってた奴らだよな？」

「め、目立ってたって何よ！？」と、桜姫が食ってかかった。

「ちょ、ちょっと桜姫！？　落ち着いて」と、私が止めた。

「それで早駆くんは何の用なんだい？」と、立花くんが尋ねた。

「お前たち……ウザいんだよ」

「『えっ？』」

三人とも声を揃えて驚いた。

「う、ウザいって何よ！？」と、またも桜姫が食ってかかった。

「お前らのことは、最初っから気にくわなかったんだよ」

「何なのよ！？　何が気にくわなかったのよ？」

「全部だよ！　特に、そこの男！　お前を見てるとイライラする」

「勝手な言いがかりはやめなよ。みっともない」

立花くん、何だかかっこいい！

「そういう態度がムカつくんだよ！　今年は受験もあるんだから、

邪魔すんなよ！」
篠山くん、何気に真面目！？
「気にくわなかったんならごめん。今後気をつけるわ」と、私がフォローをした。
「ちっ。……今度から気をつけろよ」
意外にも、あっさり引き下がった。聞き分けのいい人で助かった。
篠山くんは自分の席に戻っていった。
「篠山くんは私たちのことをウザいって言ってたけど、他の人はどう思ってるのかな？」と、桜姫が言った。
「他にも、ウザいとか鬱陶(うっとう)しいとか思ってる人はいるんじゃないかな」と、立花くんが言った。
「だったら、朝の挨拶はやめた方がいいんじゃない」と、私が提案した。
「……こんなことで諦めたくない！」と、桜姫が怒りのこもった口調で言った。
「どうして？」と、立花くんが尋ねた。
「私は、今年変わるって決めたの。だからこんなことで諦めたくないの！」
（今年は絶対に彼氏をつくる！）
桜姫は心の中で自分に言い聞かせていた。
「よしっ！　じゃあ、明日も頑張ろう」
「うん！　桜姫のために頑張ろう」
「私だけのためじゃないでしょ！？　陽もでしょ！」
「そうだね」
私たちは、明日からも挨拶を続けることを決めた。……篠山くん以外に。

☆第八話☆『協力者』

登校三日目。私たちは今日も挨拶をした。挨拶を返してくれる人が増えたような気がした。
「みんな結構挨拶を返してくれるようになってきたわね」
「うん。僕たちの印象が変わってきてるのかもしれないね」
「これなら、私たちと友達になってくれる人が出てくるかもしれないね」
私たちは期待に胸を膨らませていた。しかし、放課後まで誰も声を掛けてくれなかった。そして、放課後の三人の会議が開かれた。
「私たちのやってることって無意味なのかな？」と、私は尋ねた。
「そんなことは無いよ！　少しずつだけど、効果が出てるよ」と、立花くんが言った。
「そうだよね。明日も頑張ろう！」と、桜姫が言った。
ガラガラガラ……。急に教室のドアが開き、一人の人が立っていた。
「田中、何を頑張るんだ？」
そこに立っていたのは、原先生だった。
「せ、先生！？　どうしてここに？」
「なんか騒がしかったから、様子を見に来たんだ。それで田中、何を頑張るんだ？」
「え、えっとですね……」
「挨拶ですよ」と、立花くんがフォローをした。
「挨拶か。何で挨拶を頑張るんだ？」
「えーっと、……なんとなくです」
「そうか。なんとなくで、こんな会議みたいなことをしているのか」
「……」
「田中、本当の理由は何だ？」
「男子と……仲良くなりたかったからです」

「そうか。男子と仲良くなって、何をするんだ？」
「勉強を教えてもらうんです」と、私は桜姫をフォローした。
「なるほど。……別に男子だけに限定する必要は無いんじゃないか？」
「桜姫が咄嗟に口走っただけですよ。もちろん女子とも仲良くなって、勉強を教えてもらいますよ」
「そうなのか田中？」
「は、はい。そうです」
「それならそうと早く言えよ。先生も協力してやる！」
「『ほぇっ？』」
三人とも一斉に驚いた。
「何だその声は？　先生が協力するのは嫌か？」
「『いえ、滅相もございません』」
三人とも息ピッタリだった。
「お前たち、本当に仲が良いんだな。よし、俺は明日からお前たちに協力する」
「『よ、よろしくお願いします』」
「おう、任せとけ！　それじゃあまた明日な」
なんか知らないけど、先生が私たちに協力してくれることになった。……ややこしい事にならなければいいけど。

☆第九話☆『せ、先生！？』

登校四日目。朝のホームルームが始まった。先生が余計なことをしなきゃいいけど……。
「みんなおはよう。ちゃんと勉強してるか？」
「当たり前じゃないですか」と、篠山くんが言った。
「そうか、篠山は勉強熱心なんだな。……効率良く勉強する方法があるんだが、知りたいか？」
「効率良く勉強する方法？　それはどんな方法ですか？」
「それは……友達と一緒に勉強することだ！」
「友達と一緒に？　それだと余計に効率が悪くなると思うんですけど」
「確かにそう思うかもしれない。だけど、それは勝手な思い込みだ。友達に教えることによって、自分の勉強になる。友達に教えられることによって、その教えられたことは深く印象に残る」
「でも、一人でもふざける人がいたら、まともに勉強できないと思うんですけど」
「確かに。でも、それをしっかりと抑止できるのが友達だ」
「そんなことをしている暇は無いですよ。やっぱり一人でやった方が効率が良いですよ」
「逆に、一人でやると集中できないなんて奴もいる。それに一人じゃわからない問題だってある。そんな時に教えあえる友達がいればスムーズに勉強ができる」
先生、良いこと言いますね。
「……。ていうか、何でそんなに友達と勉強することを奨励するんですか？」
「このクラスで、友達と勉強することを望んでいる人がいるからだ」
せ、先生っ！？　余計なことを言わないでぇー。
篠山くんはこちらを睨みつけていた。私は必死に目を合わせない

ようにした。
「先生、俺は一人でどうにかしますよ。やるなら、勝手にやってくださいよ」
「……わかった。強要はできないからな。だけどな篠山、いつか差が付くぞ」
「俺は誰にも負けないっすよ」
篠山くんは、怒りのこもった声で言った。篠山くんの気迫が凄かった。
「わかった。他の奴ら、明日から朝のホームルームの時間の大半は友達と勉強をする時間にする。もちろん、一人でしたい奴がいれば、それでも構わない。自由にするといいさ。……よしっ、ホームルーム終わり」
先生は教室を出ていった。それと同時に、篠山くんが凄い形相でこちらにきた。
「お前ら、そんなに俺の邪魔がしたいのかよ！」
「そ、そんなつもりは……」
「うるせぇっ。センコーを味方につけたつもりか？　そんなのに俺は屈しねーからな！」
「ちょっ、ちょっと篠山くん！？」と言いながら、桜姫がこちらに来た。
「ちっ。……俺の邪魔をすんなよ」と、捨て台詞を吐いて、自分の席へと戻っていった。
「陽！　大丈夫？」
「桜姫！　ありがとう。……大丈夫だよ」
篠山くんがかなり必死だということが、よくわかった。
「陽、あんな奴のこと、気にしちゃダメだよ」
「う、うん」
私たちって、また篠山くんの邪魔をしてる？　このままでいいのかな？

☆第十話☆『恋の予感』

登校五日目。朝のホームルームの時間は勉強の時間になった。
「みんな、わからないことがあったら周りの奴に聞くんだぞ。もちろんおしゃべりの時間じゃないからな」
先生がそう言い終わると、桜姫が真っ先にこちらに向かって来た。
「陽～、この問題教えて～」
「この問題？　これはこうやって……」
私は桜姫に問題の解き方を教えた。
「なるほど～。とても分かりやすい説明だった」
「桜姫、大袈裟だよ」
「へぇ～、赤城さんて頭良いんだね」
急に、隣りの坂下大志（さかしたたいし）くんが話し掛けてきた。しかし、これは絶好のチャンスかもしれない。
「坂下くん、そんなこと無いよ」
「いや、赤城さんは頭が良い。実は、俺もその問題が解けなかったんだ」
「そうなんだ」
「……俺にも解き方を教えてくれないかな？」
「うん、いいよ」
私は坂下くんに、問題の解き方を懇切丁寧に教えた。
「なるほど。かなり分かりやすい」
「そんなこと無いわ」
「謙遜する事はないよ。……明日もまた教えてもらってもいいかな？」
「私に分かることなら、いつでも」
「ありがとう！」
「うん。……ねぇ、坂下くん」
「何？」

「私たちって、友達になったのかな？」
「急にどうしたの？」
「私たちってさぁ、登校初日にみんなに変な印象を与えたでしょ？
坂下くんもそのことを気にしてるのかなぁ～と思ったの」
「そんなこと最初から気にしてないよ。俺たちは、もう友達だよ」
坂下くんは満面の笑みでそう答えた。
ドキッ。この一言に、陽の心は奪われた。
「そ、そうだね……。そ、そういえば、私の友達を紹介するね」
私は桜に顔を向けて、桜姫のことを坂下くんに紹介した。
「私の友達の田中桜姫。友達というか、親友だよ」
「ど、どうも、田中桜姫です。えっと～……とりあえずよろしくね」
珍しく桜姫が緊張してる。
「よろしくね、田中さん。俺も田中さんたちと親友になれるかな？」
「な、なれると思う！」
「むしろ、それ以上の」
桜姫が全部言葉にする前に、私は桜姫の口を塞いだ。
「それ以上？」
「あははは、何でもないの。そうよね桜姫」
桜姫は必死に頷いた。それを見た坂下くんは、微笑んでいた。
「ホントに仲が良いんだね。俺ももっと赤城さんや田中さんのことを知って、もっと仲良くなる！　そして俺のこともっと知ってもらう！」
「私ももっと知ってもらいたい。これからよろしくね」
「こちらこそ、よろしく」
坂下くんはとても情熱的な人なのかも……。
陽の心は、坂下へともの凄いスピードで向かっていた。

☆第十一話☆『好きなのかな？』

登校六日目。今日の陽はいつもよりもよりいっそう輝いて見えた。
「赤城さん、おはよー」
「あ、坂下くん！　おはよー」
「今日も勉強を教えてもらってもいいかな？」
「もちろん！」
「じゃあ、ここのところを教えて！」
「ここ？　ここはこうやって……」
陽は坂下くんに、勉強を真剣に教えた。
「なるほど。今回の説明もとても分かりやすい」
「そ、そうかな？」と言いながら、陽は赤面していた。
「うん、分かりやすい。……あれ、赤城さん顔が赤いよ。熱があるんじゃないの？」
そう言いながら、陽の額に手を当てた。
陽は、さらに赤面した。
「……熱は無いみたいだ。大丈夫？」
「だ、大丈夫だよ」
「一応、保健室に行く？」
「ほ、ホントに大丈夫だよ」と、陽は必死に言った。
「そう、ならいいんだけど」
そんなこんなで朝のホームルームが終わった。
そして、今日の授業も終わり、放課後になった。そして、いつも通りの会議が開かれた。
「陽～、朝のホームルームの時に、坂下くんといい雰囲気になってなかった？」
「そ、そんなこと無いよ！」
「またまたー。顔が赤くなってたわよ」
「桜姫、見てたの？」

「もちろん！　陽は坂下くんのこと……好き？」
「さ、さぁ？　どうなんだろう？」
「えっ！　赤城さん、坂下くんのことが好きなの？」
「た、立花くん！？　声が大きいっ」
「ご、ごめん。それで……どうなの？」
「この感情は、好きってことなのかな？　今の段階では分からない」
「今の段階では分からないってことは、今後好きになる可能性は有るってこと？」
「それも分からない」
「そう。もし陽が、坂下くんのことを好きになったときは、私は全力で陽に協力する！」
「桜姫……ありがとう！」
「ぼ、僕も協力する！」
「立花くんもありがとう！」
（私は坂下くんのことが好きなのかな？）
陽は悩んでいた。こんなに早く、人を好きになるのかと……。
「ねぇ桜姫、立花くん。初めて顔を合わせてから一週間も経たないうちに、人を好きになることってあるのかな？」
「『もちろん！』」
桜姫と立花くんは同時に答えた。
「一目惚れだってあるのよ。人を好きになる早さなんて、人それぞれよ」
「そうだね。陽ちゃんが『この人と一緒に居たい！』と思ったなら、それでいいと思う」
「桜姫、立花くん。ありがとう！」
「陽、今年中にいい恋をして、彼氏をつくりなさいよ！」
「桜姫もね！　もちろん立花くんも！」
「僕も頑張る！」
こうして、それぞれの決意が固まり、放課後の会議は終わった。

☆第十二話☆『私のこと、どう思う？』

登校七日目。今日もまた、朝のホームルームで、陽は坂下くんに勉強を教えていた。
「赤城さん、今日の説明もとても分かりやすかったよ！」
坂下くんは満面の笑みで言った。その笑顔を見て、陽の心はときめいていた。
「……ねぇ、坂下くん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
「何？」
「私のこと……どう思ってる？」
「うーん……頭が良くて、良い人かな」
「……そうなんだ」
「こらっ！　そこ、私語は厳禁だぞ！」
こちらに原先生が来て、原先生に注意された。
「すみません」と、坂下くんが謝った。
「次からは気をつけるように」
「はい」
原先生は教壇に戻った。
「坂下くん、ごめんね」と、私は小声で謝った。
「気にしないで」と、坂下くんも小声で言った。
「よしっ、ホームルーム終わりだ」
原先生の号令でホームルームが終わった。それと同時に坂下くんは教室を出て行き、そして桜姫がこちらに向かってきた。
「ねぇ陽、何で先生に怒られてたの？」
「坂下くんと少しお喋りしてたら、見つかっちゃった」
「何の話をしてたの？」
「えっと……秘密」
「えぇ～、教えてよ～」
「ダーメ」

「私たち親友じゃん」
「……わかった」
「それで、何の話をしてたの？」
「……坂下くんは、私のことをどう思ってるかっていう話」
「陽……大胆だね！」
「桜姫！　声が大きいっ！」
「あっ、ごめん。……それで、坂下くんは何て答えたの？」
「頭が良くて、良い人だって」
「……それだけ？」
「うん」
「頭が良くて、良い人ね。……好きか嫌いか聞かなかったの？」
「そ、そんなこと……聞けるわけ無いでしょ！」
「そうなんだ。残念」
「……桜姫は私のことばかり気にしてるけど、桜姫は好きな人とか、気になる人とかいないの？」
「私？　私はまだいない」
「そうなんだ。友達は増えた？」
「友達は増えたよ」
「何て名前の人？」
「切室昇（きむろしょう）くん。私の隣の席の人」
私は桜姫の隣の席の人を見た。
「イケメンじゃん。桜姫は切室くんのこと好きじゃないの？」
「今年の私は性格を重視するの！　見た目だけじゃ決めらんないよ」
「そうだったね」
「そうよ。だから、切室くんのことを、もっと知ろうと思ってるの」
「桜姫……。なんか変わったね」
「そうかな？」
「うん。前より、ちょっと大人になった気がする」
「そんなことないよ。……陽は前よりももっと輝いてる。前も輝いてたけど」

「そんなことないよ」
「お互いに、知らないうちに、少しずつだけど成長してるのかもね」
「そうなのかもね」
陽と桜姫は、自分たちの恋のために、少しずつ前進していた。

☆第十三話☆『坂下くんの家に行ってみない？』

登校八日目。今日は坂下くんは休みだった。風邪でも引いたのかな？

朝のホームルームが終わり、桜姫が私の席の所に来た。

「坂下くん休みだね」

「……うん」

「寂しい？」

「……ちょっと寂しいかも」

「もぉ～、素直じゃないなぁー。かなり寂しいんでしょ？」

「……うん」

「じゃあ、今日坂下くんの家に行ってみない？」

「行くって……どうやって？」

「うーん、……わかんない」

「わからないのに、坂下くんの家に行くなんて言ったの？」

「ごめん。……どうすれば、坂下くんの家を見つけることができるかな？」

「先生に聞く……とか、どうかな？」

「先生、教えてくれるかな？」

「……たぶん教えてくれないね」

「先生が何を教えてくれないんだ？」と言いながら、先生が横に立っていた。

「せ、先生！？」

「赤城、何でそんなに驚くんだ？」

「お、驚いてないですよ」

「そうか。……それで、先生が何を教えてくれないんだ？　先生が教えられることなら、何でも教えてやる」

「えーっと……」

私は答えに戸惑っていた。

「先生！」と、急に桜姫が言った。
「田中、どうした？」
「坂下くんの家にプリントを届けたいんですけど、住所を教えてくれませんか？」と、桜姫がフォローをしてくれた。
「プリントを届けてもらうのはありがたいんだが、住所を教えるのは……」
「じゃあ坂下くんに、家に行っていいかどうか、確認をしてください」
「何でお前たちが届けるんだ？」
「私たちは“友達”だからです」
「……わかった。放課後までに確認をしておこう」
「あっ！　確認をする時に、私と陽で行くって伝えてください」
「わかった。それじゃあ、結果は放課後に」
「ありがとうございます」
原先生は、職員室へと戻っていった。
「桜姫……ありがとう」
「別にいいよ。……でも、ホントは陽の口から伝えて欲しかった」
「ごめん。言おうと思ったんだけど……言えなかった」
「ま、しょうがないよ。坂下くんの家に行ったら、たくさんお喋りしてくるんだよ」
「えっ？　桜姫は行かないの？」
「私は用事があるから、行けない。だから、陽一人で行ってきなよ」
「……わかった。次は頑張る！」

そして、放課後になった。
「赤城、田中。坂下に電話をして、確認をしたぞ」
「それで、結果は……」
「ＯＫだそうだ」
「ありがとうございます！」

「これが住所だ。じゃあ、このプリントを届けてくれ。よろしくな！」
「はい。任せてください」
原先生は教室を出た。
「陽、ここからはあなたの独壇場よ。頑張って！」
「うん！　じゃあ行ってくる！」
私は桜姫を教室に残して、坂下くんの家へ向かった。
「陽……大丈夫かな？」

☆第十四話☆『坂下くんの家』

「――ここが坂下くんの家」
陽の目の前には、とても大きな二階建ての家が建っていた。
「おっきい～」
陽は唖然としていた。
「……見取れてる場合じゃなかった」
陽は坂下くんの家の扉の前に立って、チャイムに指を当てていた。
（押せ！　押すのよ、私！）
ピーンポーン。とうとうチャイムを押してしまった。もう後には引けない。
「はーい」という声がして、扉が開いた。
そこには、坂下くんのお母さんらしき人が立っていた。
「あら、とても可愛い人」
「こ、こんにちは。坂下く……じゃなくて、大志くんのクラスメートの赤城陽と申します。大志くんにプリントを届けに来ました」
「あら、ありがとうございます。私は大志の母です。……よかったら部屋に上がって、大志に会ってやってください」
「わ、私は……」
「陽さんが会ってくれると、大志が喜びます」
「……それじゃあ、お邪魔します」
「どうぞ」
私は、坂下くんのお母さんに部屋の前まで案内してもらった。坂下くんの部屋は二階にあった。
「大志の部屋はここです。大志のことをよろしくお願いします」
「はい」
坂下くんのお母さんは、階段を降りていった。
私は、坂下くんの部屋のドアノブに手をかけていた。
「入っていいよ」と、中から坂下くんの声がした。

私はドアを開けた。
「こ、こんにちは、坂下くん」
「赤城さん、こんにちは。田中さんは一緒じゃなかったの？」
「さ、桜姫は用事があったみたいで、一緒に来れなかったの」
「そうなんだ」
「体調は大丈夫？」
「ちょっと風邪引いちゃってて。でも、今は大丈夫。明日からは学校に行けるよ」
「良かった。……あっ、これが今日の分のプリントだよ」
「ありがとう。赤城さんの家ってここから近いの？」
「うーん……、まあまあ近いかな」
「わざわざ届けてもらってごめん」
「あっ、気にしないで」
「今度何かお返しをするよ」
「別にいいよ」
「いつも勉強を教えてもらってるし」
「あれは私が好きでやってることだから」
「じゃあ、……今度の日曜日に遊びに行かない？」
「えっ？」
「嫌……かな？」
「……嫌じゃないよ」
「じゃあ、行こっ！」
「……うん、わかった。……そろそろ帰るね」
「うん。また明日」
「それじゃあまた」
私は坂下くんの部屋を出て、階段を降りた。
「赤城さん、もう帰るんですか？」
「はい。お邪魔しました」
「今日はありがとうございました。今後も大志のことをよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします。では、失礼します」
私は坂下くんの家を後にし、家路についた。
「日曜日……楽しみだなぁ～」

☆第十五話☆『待ち遠しい』

登校九日目。陽の顔は、いつもよりもゆるゆるだった。そこに登校してきたばかりの桜姫が近づいてきた。
「陽、嬉しそうな顔をしてるけど、昨日は坂下くんとちゃんとお喋りできたの？」
「うん。お喋りできたよ～」
「何を話したの？」
「坂下くんの体調について」
「それだけ？」
「あとは……秘密」
「まさか……デートの約束とか。……それは無いか。いくら何でも、早すぎるよね」
「……」
「陽？　……もしかして」
「……うん。デートの約束をしちゃった」
「えーっ！」
桜姫が驚いていたら、教室に坂下くんが入ってきた。
「赤城さん、おはよう。昨日はありがとう」
「お、おはよう。ど、どういたしまして」
「坂下くん、おはよう」
「田中さん、おはよう」
「体調はもう大丈夫なの？」
「うん、大丈夫」
「よかったね。それじゃあ、私は席に戻るね」
桜姫は、私にウィンクをして自分の席に戻っていった。
「田中さん、良い人だね」
「うん」
私たちが話をしてる間に、先生が教壇に立っていた。

「はーい、お喋りはそこまでだ。朝のホームルームを始めるぞ」
いつも通りに、朝のホームルームが始まった。
「赤城さん、今日はしっかり解いてきたよ。答え合わせをしてもいいかな？」
「うん、答え合わせをしよう」
陽と坂下くんは答え合わせを始めた。
「――――全問正解。やったね坂下くん！」
「赤城さんのおかげだよ」
「私は、ほとんど何もしてないわ。坂下くんが努力したからだよ」
「そんなこと無いよ。俺がこんなに解けるようになったのは、赤城さんが一所懸命教えてくれたからだよ」
「そうかな？」
「そうだよ。いつもお世話になってるから、日曜日にたくさん恩返しをするよ」
「う、うん。日曜日楽しみにしてる」
私たちは、ホームルームの時間ということを忘れて、話に集中していた。
「赤城ぃ～、坂下ぁ～。今は何の時間だぁ？」
原先生が怒りを露わにしていた。
「『すみません』」と、二人は同時に謝った。
「坂下、元気になったのは良いことだが、ほどほどにしとけよ」
「……はい」
「赤城、お前も浮かれてちゃダメだぞ！」
「……はい。すみませんでした」
「分かればいいんだ。よしっ、ホームルーム終わりだ」
原先生は教室を出ていった。
「坂下くん、ごめん」
「気にしないで」
「この前も迷惑をかけたのに……」
「俺は気にしてないから。それよりも、日曜日のことを決めようよ」

「うん！」
「集合場所は……駅前にしよう。駅は家から近い？」
「うん。結構近いよ」
「集合場所は駅前でＯＫ。集合時間は何時にする？」
「うーん……、正午はどうかな？」
「よしっ、じゃあ正午にしよう。これで決まりだね」
「うん。決まりだね」
「当日のスケジュールは俺に任せて！」
「うん、楽しみしとくね！」
日曜日がとても待ち遠しい。……はぁ。早く日曜日にならないかなぁー。

☆第十六話☆『デート前の会議』

登校十日目の放課後。陽と桜姫と立花くんによる会議が開かれていた。

「陽、日曜日に坂下くんとデートってホントなの？」

「えっ？　陽ちゃん、坂下くんとデートをするの？」

「……うん」

「陽、デート当日のスケジュールは決まってるの？」

「うん。坂下くんがスケジュールを決めてくるんだって」

「坂下くんはしっかりしてるんだね」

「あら。立花くんはデートのスケジュールを組めないの？」

「桜姫ちゃん意地悪な質問だね。僕だって、スケジュールくらいは組めるよ」

「へぇー、そうなんだ」

「何で棒読みなの？」

「なんとなくよ。そういえば、陽は日曜日に告白するんでしょ？」

「ふぇっ？」

「こんな機会は滅多に無いわよ」

「そうだよ陽ちゃん。この機会を逃したら、次は無いかもしれないよ」

「次が無いなんてことは有り得ないけど」

「……なんか今日の桜姫ちゃんきついね」

「そんなこと無いわ。それで、陽は告白するの？」

「む、無理だよー。こ、告白だなんて」

「……そうよね。陽はシャイだもんね！」

「それもあるけど……。ちょっと不安もあるの……」

「……卒業式にフラれたこと？」

「うん。……また同じことになるんじゃないかって思ってるの」

「誰だってそう思うわよ。でも、坂下くんも同じことをするとは限

らないじゃない」
「それはそうなんだけど……」
「……陽ちゃんのことをフって、それにこんな心の傷を残すなんて。陽ちゃんの元彼は最低な奴だ！」
「珍しく立花くんと考えが一致したわ！　私もあの人は最低だと思う」
「彼のことをそんなに悪く言わないで！　……私にも悪いとこがあったから」
「ごめん、陽」
「陽ちゃん、ごめん」
「私こそ……ごめん。二人は私のことを考えてくれてるんだよね。それなのに私……」
「陽、気にしないで。私たち、陽に幸せになってほしいだけ」
「そうだよ。だから、陽ちゃんは陽ちゃんのペースで恋をすればいいと思う」
「二人ともありがとう！　私は、今できることを全力でやる！」
「やっといつもの陽らしくなってきたね」
「陽ちゃんはいつもの陽ちゃんのままで大丈夫だよ」
「うん」
「日曜日はとことん楽しんでくるんだよ」
「うん。楽しんでくる！」
こうして、デート前の放課後会議は終わった。

☆第十七話☆『運命のデート』

とうとうこの日が来てしまった。運命の日曜日。
待ち合わせ場所の駅に、集合時間の十分前に着いたけど、坂下くんはもう集合場所に来ていた。
「ご、ごめん。待った？」
「ううん、俺もさっき着いたところ。それじゃあ行こっか」
「うん！」
私たちは歩き始めた。私は、どのくらいの距離で歩けばいいかわからず、坂下くんの少し斜め後ろを歩いた。
「赤城さん、俺と一緒に歩くのは恥ずかしい？」
「そ、そんなことは無いよ！」
「よかった。赤城さん、ご飯は食べてきたの？」
「ううん。まだだよ」
「なら、まずはご飯を食べに行こう。俺のオススメの店があるんだけど、そこでいいかな？」
「うん」
私たちは、坂下くんオススメのレストランに着いた。
「お洒落（しゃれ）なところだね！」
「うん。料理も凄く美味しいんだよ！　それじゃあ、中に入ろうか」
「うん」
私たちはレストランの中に入って、テーブルについた。
「全部美味しそうだね」
「俺のオススメはパスタかな」
「そうなの？　じゃあ、私はパスタにする」
「俺もパスタにするよ」
私たちはパスタを注文した。
「パスタ美味しいぃ～」
「よかった、気に入ってもらえて。ここのレストランは他の料理も

美味しいよ」
「そうなんだ。それならまた来たいなぁー」
「じゃあ、また一緒に来ようか？」
「えっ？」
「嫌……かな？」
「い、嫌じゃないよ。また来たい！」
「うん、じゃあまた来よう」
私たちはパスタを完食し、レジに向かった。
「お会計、三千円になります」
私がお財布からお金を出そうとすると、坂下くんは私の手を押さえて、
「赤城さん、ここは俺が払うよ。この前のお礼」と言ってくれた。
会計が終わり、レストランから出た。
「ご馳走さまでした！」
「よかった。次はボーリングに行こう。赤城さん、ボーリングは嫌い？」
「ううん。嫌いじゃないけど、ちょっと苦手かな」
「じゃあ俺が特訓をしてあげるよ」
「ありがとう！　それじゃあボーリングに行こう」
私たちはボーリング場へ向かった。ボーリング場までは、電車と徒歩で行った。
「ボーリングやるの久しぶり」
「俺も久しぶり。よーし、楽しむぞー」
私と坂下くんはボーリングを始めた。
最初の一投目。私はガーター、坂下くんはストライクだった。
「坂下くん、ホントに上手だね」
「そんなこと無いよ。赤城さんもちょっと練習をすれば上手くなるよ」
二投目を投げる前に、坂下くんに投げ方のコツや立ち位置を教えてもらった。そして私は二投目を投げた。

「やったぁー、スペアだ！」
「赤城さん、呑み込み早いね～」
「坂下くんの教え方が上手いんだよ」
「そうかな？　……よし、じゃあ次投げよう」
私たちは一ゲームを終えて、スコアを見たら、坂下くんと十ピン差だった。そして私たちはボーリング場を出た。
「赤城さん、惜しかったね」
「ちょっと悔しい。また勝負しようね」
「俺への挑戦なら、いつでも受けるよ。次は……ゲーセンに行こっか」
「うん。……プリクラとか撮りたいなぁ」
「じゃあプリクラを撮ろう」
私たちはゲーセンへ向かった。ゲーセンまでの道は人通りが少なく、一人一人の顔がはっきりとわかった。
「赤城さん、疲れてない？」
「大丈夫だよ。坂下くんは疲れてないの？」
「俺も大丈夫」
坂下くんと会話しながら、たまにすれ違う人の顔を少し見ていた。歩いている人の中にはカップルもいた。
「あれ？　陽？」
私の名前を呼ぶ声がしたから振り返ってみると、そこには一組のカップルが立っていた。
「……鷹（たか）！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2530y/

愛、変わらず

2011年11月22日03時13分発行